

説教 『マリア、キリストの前兆』 山本護 牧師
聖書 イザヤ書 61:1/ルカによる福音書 1:47~53

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます(ルカ 1:47)」。マリアの「魂」が主を崇め、「霊」が神を喜び讃える。魂は主に、霊は神に対応しているのか。いや分けられるのではない。魂や霊は、感覚よりも深いところ。マリアはここから主を崇め、喜びに溢れて神を讃えている。だが喜びとは、心躍る愉快的なこととは違う。人生の歩み方を変えてしまうほどの「魂の震え」だろう。

「あがめる」という言葉は「大きくする」の謂。神が大きくなると相対的に自分は「小さく」なる。教会では「私が小さくされる」と言い習わされているが、「神を大きくする」がふさわしいと思う。人間の自然は「私の魂は私を崇める」、「私の霊は私を讃える」だ。また多くの人に崇められ、讃えられたい。自然な自己愛が特段悪いわけではない。社会のあらゆる場では、当然の基準なのだ(エフェソ 5:29)。むしろ他である何者かを自分よりも崇めることは、不自然だし危険も伴う。だから忘れてはならない。神の愛があるゆえ、私たちは愛を知るということを。精一杯愛しても、神の愛がそれを凌いでいる。

「わたしの魂が主をあがめる」時、神の御業が働いていて、私は小さくされ「わたしの霊は〜救い主である神を喜びたたえる(ルカ 1:47)」。ここを間違えてはならない。崇めるから御業が働くのではなく、御業があるゆえに「わたしの魂が主をあがめる」のだ。つまり「身分の低い、この主のはしためにも、目を留めてくださった(1:48a)」出来事が先にあつて、「わたしの魂が主をあがめる」ことになった。

この讃美ゆえに、ひっそり片隅にいた娘は、世界中に知られることになる。「今から後、いつの世の人も、わたしを幸いな者と言うでしょう(1:48b)」。確かにこの時期、マリアのことは世界の教会で読まれ、説教され、讃えられている。また西欧やビザンチンでは、彼女の聖歌「Magnificat=大きくされる」が数多く作られた。まさに「その憐れみは世々に限りなく、主を畏れる者に及ぶ(1:50)」。

マリアには重大な覚悟があつた。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように(1:38)」。そしてマリアの身(胎)にキリストが宿った。一貫して「身分の低い、はしために目を留める(1:48)」キリストの霊性が早くも現れている。イエスは「貧しい人々は、飢えている人々は、泣いている人々は幸いだ(6:20~21)」と告げた。主なる神が「身分の低い、主のはしために目を留める」からだ。「今泣いている人々は、笑うようになる(6:21b)」。「笑う」とは、マリアの「霊が救い主である神を喜びたたえる(1:47)」ことに近い。イエスの周囲に起こる奇跡は、この時すでに始まっていた。

「主なる神の霊がわたしをとらえた(イザヤ 61:1)」。預言者は御言葉を預って「貧しい人々に良い知らせ伝えた(61:1)」。マリアは「いつの世の人も、わたしを幸いな者と言うでしょう(ルカ 1:48)」と、はしためたる身をいわば証明書にして、飢え、泣いている人々に救いの到来を証した。預言者は「打ち砕かれた心を包み、捕われた人には自由を、つながれている人には解放を告知させた(イザヤ 61:1)」。マリアは「飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返す(ルカ 1:53)」現実の転換を言い表した。私たちの希望は、隠された自分の貧しさと孤独。そこに救い主が目を留めてくださるから(1:48)。



【おまけのひとこと】

望遠鏡を逆さまに覗いた時と似ている 通常 目は凹レンズ側にあり 凸レンズ側に自己像が立つ
キリストを見 キリスト側から私自身を見ると 私は小さくされ よりくつきり見える恵みに驚く